

## ー海外だよりー

# 英国ダービーならびに米国ソルトレイクシティでの在外研究

福岡大学 川中 健太郎

キーワード：ノッティンガム大学，ユタ大学

## 1. はじめに

福岡大学在外研修制度を利用して、2022年1月～9月に英国ノッティンガム大学医学部の臨床・代謝・分子生理学研究部門ならびに米国ユタ大学健康学部の栄養学科に滞在する機会を得ました。この場を借りて、その様子について報告させていただきます。

## 2. 出発前

私は博士課程終了後の1997年～2001年にかけて米国セントルイス（ワシントン大学医学部）にポストドクとして留学した経験があります。骨格筋の運動適応に関する研究で著名な John Holloszy 教授の研究室で学びましたが、自分の研究者としての礎を築く有意義な経験でした。帰国当初から、チャンスがあればもう一度海外での研究生活を体験したいと考え、前任校（地方の新設私立大学）では、再三にわたって教員の在外研修制度を設置するように法人に働きかけました。「大学での教育・研究の質を向上させるには教員の充電期間は必要不可欠」とも考えたからです。しかし、大学法人は「教員を外で遊ばせるわけにはいかない」と取り合ってもらえませんでした。

その後、2015年に福岡大学スポーツ科学部に移動し、在外研修制度があることを知り、早速、希望を出しました。そして、出発の約3年前から研修先の選定作業に入りました。まずは候補研究室の論文を読みます。どこに留学しようか思案しながら論文を読む作業は楽しく、また、真剣に読むので勉強になります。さらに、関係者を探してボスの人柄等もリサーチしました。研究内容が魅力的でも、外国人に対する理解が薄い等の人は除外する必要があります。情報収集のためのコンタクトを通じて、数名の国内研究者とも知り合うことができました。振り返ると、この頃から私の在外研修は始まっていたのだと思います。

最終的には、共同研究の実施が既に決まっていた英国ノッティンガム大学（ダービー）の Phil Atherton

教授の研究室に決めました。研修出発の約1年前です。卒論生を抱えており後期を不在にするのは困難なので、研修期間は1月～9月と決めていました。当初は8か月間に亘ってノッティンガム大学に滞在する予定でしたが、腰を据えて研究するならば最低1年間の滞在が必要であり、8か月間は中途半端です。そこで、「どうせ中途半端ならば、ノッティンガム大学の滞在を6か月間に短縮して、もう一か所行こう」と思い立ちました。「広く浅く、異なる研究室を体験しよう」との発想です。出発まで5か月の時期でしたが、ぎりぎり間に合いそうです。面識があった米国ユタ大学（ソルトレイクシティ）の Katsu Funai 教授に早速連絡して快諾を得ました。2か国のビザ取得は大変で、自力でやるのは困難と判断し、お金を払ってビザ取得のコンサルタントに依頼しました。いろいろとお金はかかりましたが、2か所行けたことで「異なる文化・自然・研究環境」を体験でき、より有意義な在外研修となりました。

## 3. 英国ダービー到着

後期終了直前の2022年1月11日に福岡を立ち、英国に向かいました。授業は全て終了していましたが、卒論発表会や期末試験については助教の木戸康平先生にすべてお願いしました（その後の前期のゼミ指導も）。快く送り出していただいた木戸先生に心より感謝いたします。



写真1. 英国ダービーの落ち着いた街並み

この時期、日本ではまだコロナ禍の真只中でした。成田を発つ飛行機に乗客の姿はほとんどありません。しかし、中東のドバイで英国行きに乗り換えると状況は一変、完全満席です。そして、目的地の英国ダービーに到着。こじんまりとした街ですが、古くて落ち着いた街並みと緑の公園に感動です。

長旅の疲れも吹き飛び、早速、広い公園をジョギングしました。



写真2. 英国ダービーにて。アパート近くに広がる緑豊かな公園。

ちなみに日本や米国に比べて、英国ではジョギングしている人は少ないです。その代わりに散歩している人の数がとても多いです。冬の時期、英国は天気は冴えないのですが、小雨が降っていても、公園には散歩している人が必ず一定数います。家族で、あるいは、友人同士で語らいながら散歩する文化が英国には根付いています。そして、街にはマスクをしている人の姿はなく、レストランにも普通に客が入っています。英国ではすでにポストコロナに移行していることを実感しました。といっても、コロナウィルスがなくなったわけではありません。到着翌日、通りがかりに見つけたワクチン接種会場に飛び込んでブースター接種を行いました。本当は掛かり付け医を通じて予約が必要なのですが、その点は柔軟対応でした。到着1週間後には、研究室のボスの Atherton 教授に誘われてバーにも行きました。酒の肴も無しにひたすらビールを飲み続けるのが英国流です。ビール1杯飲んで次は次のバーに移動します。5軒梯子しました。しかし、その後、Atherton 教授のコロナ感染が判明するという笑えないオチがついています（私は大丈夫でした）。

到着後はホテルに約3週間滞在しましたが、長期滞在ということで格安で広い部屋を使わせてくれました。その間、スマホの地図を片手に方々を歩き回り、アパート物件を探しました。目ぼしい物件があれば、

片っ端から電話やメールで連絡します。英語での連絡・交渉に苦しみながらも、何とかダービー大聖堂が目の前に見えるアパートに落ち着きました。眺望は最高です。ただ、夜中にボイラーでお湯を沸かして、それを1日かけて使用する給湯システムになっており、沸かせるお湯の量が非常に限られています。たっぷり湯舟での入浴は無理でした。どうも、日本人とは違って英国人に「湯水のごとく」の概念はないようです。実験室での実験機器洗浄の際にも、使用する水の量が少なく感じたのは気のせいでしょうか。

#### 4. ノッティンガム大学 Phil Atherton 研究室と英国ダービー生活

Philip Atherton 教授（通称 Phil）は40歳代前半。テニユアスタッフ2名、助教・テクニシャン等のスタッフ4名、ポスドク3名、博士課程の大学院生が15名程度のビッグラボを率い、臨床・代謝・分子生理学研究部門のチェアマンも務めています。Phil は若い時にマラソンを2時間20分で走り、ボクシングのプロライセンスも持っていたという並外れたスポーツマンです。また、大学入学前には陸軍に在籍していたという異色経歴の持ち主です。現在、サルコペニア（加齢性筋萎縮症）が世界的な問題ですが、彼の研究テーマの中心は“高齢者における筋量維持・増加の方法とメカニズム”。この研究分野における世界のトップランナーです。彼は、筋量を増やす可能性のある処方であれば、それが運動であれ、食事であれ、薬剤であれ、何でも興味を持ちます。そして、大掛かりな介入研究（ランダム化比較試験）を実行に移します。もちろん、これはお金と労力に余裕があるからです。私も Phil をお願いして、中高齢者を対象とした16週間の介入試験に被験者として参加しました。老化防止の秘薬（発表前なので内容は明かせません）が筋力トレーニング効果に及ぼす効果を検討する実験です。毎日、秘薬(?)を飲みながら、担当大学院生の管理下で週3回の筋力トレーニングを実施しました。被験者になることで、筋バイオブシーをはじめとした様々な実験測定を体験でき、また、大学院生とのコミュニケーションを図ることができて有意義でした。ちなみに筋トレは、ヨーロッパの運動生理学研究ではよく行われる片脚トレーニングです。筋トレしない方の脚をコントロールとします。食事や生活習慣等全身に作用する因子の影響を除去できるので、被験者・験者ともに労力を軽減できます。被験者数も半数で済むので効率的な実験デザインとなります。





写真3. 英国ダービーの Atherton 教授の研究室にて。被験者として片脚トレーニングに取り組む著者。

Phil は私のために教員用居室も用意してくれました。居室の窓からは緑の木々が風に揺れる様子を眺めることができ、最高の環境です。そして、ダービーでは、福岡大学で採取した筋サンプル（我々と Phil 研究室との共同研究サンプル）の解析を主に行いました。被験者や実験動物に重水素水を摂取させて体内のアミノ酸を重水素ラベルして、このアミノ酸がどのくらいの速度で筋タンパク質に組み込まれるかを測定することで筋タンパク質合成速度を評価します。筋バイオプシーは行う必要がありますが、それ以外は非侵襲的に実施できる優れた方法です。筋バイオプシーは福岡大学で実施できるのですが、最終的に筋タンパク質に含まれる重水素を安定同位体比質量分析計で検出する必要があります、このステップをダービーで行いました。サンプル数が200個近くあり、ダービー滞在の6か月間で解析を終了させるように頑張りました。英国では（米国でも同様ですが）、日本のように夜遅くまで研究室に居残る実験スタイルは好まれません。基本的に17時以降は早く帰るようにいわれます。しかし、9時～17時では解析が終わりません。そこで、朝6時くらいに研究室に来て実験しました。たぶん、大学院生の誰よりも実験していたと思います。

Phil はメールで仕事の相談をすると、ほぼ5分以内に返信してくれます（一言ですが）。ものすごい高速判断能力の持ち主です。大学にも不在ことが多いことが多く、これは出張が多いためでもあります。出張でなくとも自宅で仕事していることが多い様子でした。家事をしながら仕事をしていることも多く、彼には仕事とそ

れ以外の時間の区別がないのかもしれませんが。新しい仕事のスタイルを観察できたのも興味深かったです。

英国で最も難儀したのは英会話です。British English は日本人に馴染みの深い American English とは発音・イントネーション・表現が相当に違います。もともと英語のヒアリングが苦手なこともあり、研究に関する専門的内容でも理解度が10%未満です。Phil とのリモートミーティング中にフリーズすることも度々でした（パソコンでなくて私が）。したがって、周囲とのコミュニケーションは十分とはいえません。仕方ないので、明るく大きな声で挨拶することに努めました。まあ、それで何とかかなりまし、英語が理解できないので嫌な顔をされるという経験はほとんどありませんでした。私のお世話を焼いてくれた Kenneth Smith 教授は、最後、メールで “We will miss your positive and cheerful outlook, along with your productivity.” といってくれました。

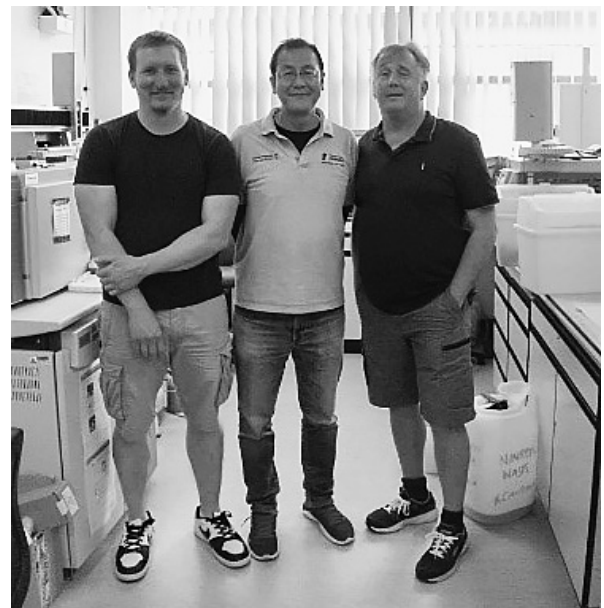


写真4. 英国ダービーの Atherton 教授の研究室にて。向かって左から Daniel Wilkinson 先生、著者、 Kenneth Smith 先生。

英国生活を開始した当初（1～3月）は日も短く天候も不順でしたが、4月以降はグングンと日が長くなり、天候もよくなります。夏時間も始まり、6月では夜10時でも薄明るい。そして、夏でも涼しくて冷房が必要ありません。平日は仕事を終えて18時に帰宅し、妻と一緒に夕食を済ませてから自宅アパート近くの緑豊かな公園で小一時間ほど散歩。その後、バーでビールを一杯という余裕のある生活を楽しめました。人生においてかけがえのない経験となりました。

## 5. 米国ソルトレイクシティへ

英国ダービーでの仕事を終えて、7月13日、米国ユタ州のソルトレイクシティに向けて出発しました。ソルトレイクシティは20年前の冬季五輪の開催地であり、勝手に涼しいところと思い込んでいましたが、真夏のソルトレイクシティは猛烈に暑いのです。40℃に上昇する日もありました。しかし、砂漠性の気候でカラカラに乾いていて、日陰に入ると涼しいのです。汗がすぐに乾くので、どんなに暑くても汗だくになりません。また、砂漠地帯なので山には木がなく岩が剥き出しです。さらに、標高1500mの高地にあるため空が異様に青いです。英国とは全く異なる自然の様に感動しました。

ちなみに、ソルトレイク五輪の開・閉会式はユタ大学のフットボールスタジアムで開催されました。選手村は学生宿舎やゲストハウスを使用したそうです。五輪でスキー種目等の開催のために整備されたパークシティは、現在、人気のリゾートタウンとして賑わっています。五輪施設の有効利用が理想的な形で行われていました。なお、ソルトレイクシティではマウンテンバイクが人気です。スキー場にはマウンテンバイクのコースが縦横無尽に整備されており、雪のないシーズンはバイクで客を集めています。

## 6. ユタ大学 Katsu Funai 研究室と米国ソルトレイクシティ生活

Katsu Funai 准教授（愛称 Katsu, 船井克彦先生）も40歳代前半。高校生の時に父親の仕事の関係でスイスに渡り、大学入学以降はずっと米国生活です。奥様も米国人。彼は運動や食事による骨格筋機能の変化を細胞膜の観点から研究しています。細胞膜は多くの種類のリン脂質でできているのですが、例えば、運動すると筋線維の細胞膜を構成するリン脂質組成が変化し、これが筋線維の太さや代謝機能に影響を及ぼすことを明らかにしています。ここ数年間で一流雑誌に次々と論文を掲載し、脂が乗り始めた新進気鋭の研究者です。ユタ大学は18の学部を要する大規模な州立大学ですが、Katsu は健康学部（Faculty of Health）の栄養学科（Nutrition & Integrative Physiology）に所属する准教授です。同時に糖尿病代謝研究センターという学際研究組織のメンバーでもあります。ちなみに、ユタ大学健康学部には Health & Kinesiology（体育や健康運動の指導者を養成）や Physical Therapy & Athletic Training（理学療法士やアスレチックトレーナーを養成）と称するスポーツ・健康・運動・リハビリテー

ション系の学科がありますが、それぞれが別組織であり日本のスポーツ科学部・体育学部のようにまとまっていません。米国では学問領域としてのスポーツ・体育学が衰退していると感じました。

Katsu は2～17歳の5人の男の子の父親で、奥様も大学教員です。子どもの朝食づくりをはじめ諸々の家事を負担しながら、何とか時間を遣り繰りしながらの日々の研究生活です。そんな忙しい生活の合間を縫って、私たち夫婦を2か月間で4回も食事やドライブに連れて行ってくれました。

英国ダービーのときは状況が異なり、ここでは自分が行う実験テーマが明確に決まっているわけではありません。Katsu からは「2か月間ゆっくり過ごしてください」と言われましたが、研究せずに遊んで2か月間過ごすのも高度なコミュニケーション能力を必要とするので自分には無理です。そこで、自分なりに次の2つの課題を立てました。①ミトコンドリア呼吸速度の測定方法をマスターする、②今後の共同研究の打ち合わせを行うの2つです。

研究室には8名ほどの博士課程大学院生がおり、彼らともコミュニケーションを図りたいと考えました。そこで、彼らには「自分が Professor であることは意識せずに、どんな仕事でも手伝うから言って欲しい。実験動物飼育の手伝いやチューブのラベル書きでもやりますよ」と伝えました。これによって、彼らも遠慮なく私に仕事をふってくれるようになり、コミュニケーションも円滑になったと思います。そして、姉御肌で面倒見の良い大学院生 Marisa Brothwell の実験アシスタントとして活動しながら2か月間を過ごしました。彼女から、骨格筋組織をすり潰してミトコンドリアを抽出し、その呼吸速度（酸素を消費する速度）の測定方法を教えてもらいました。また、休日にはアウトドア好きの旦那さん Jesse の運転する車でカヌー遊びにも連れて行ってもらいました。ソルトレイクシティの雄大な自然を満喫できました。ちなみに、ユタ大学にはレクリエーションの部署があり、そこに行けばスキー・ボート・カヌー・キャンピングテント等を有料で借りることができます。

ソルトレイクシティ滞在中には、福岡大学で私の留守を預かる木戸康平助教より、「大変、興味深い実験データが得られました」との報告を貰いました。ミトコンドリアのTCA回路の中間代謝物に関する重要知見です。早速、そのデータに基づいて新しい研究計画を立てました。Katsu にも相談して、申請する科研費の協力研究者に入ってもらいました。今後の発展が楽





写真5. 米国ソルトレイクシティにて。Funai 准教授の研究室の面々とハイキング。向かって左側は著者。中央は大学院生の Marisa Brothwell。



写真6. 米国ソルトレイクシティの Funai 准教授の研究室。隣の研究室とはドアなしで自由に行き来できる構造になっている。

しみです。

## 7. 最後に

8か月間に亘って、大学院生のような立場で研究生生活を送りました。出発前は、56歳の私に対して若い大学院生が気軽な友人感覚で接してくれるのかは疑問でしたが、実際には年齢の壁はあまり感じませんでした。友人感覚で過ごせました。年齢差を意識しない彼らの文化によるものなのでしょう。そして、日本では教授として過ごしている自分が、学生目線で研究生生活を送ることは、教員として、大変、貴重な経験となりました。また、家族（妻）と滞在できたことで、良き思い出もたくさんつくれました。最後になりましたが、在

外研修の機会を与えてくださった福岡大学スポーツ科学部の皆様に感謝申し上げます。また、年老いた母の世話や留守宅の管理を引き受け、快く私を送り出してくれた姉にもこの場所を借りて感謝いたします。



写真7. 米国ソルトレイクシティの Funai 准教授の研究室の面々と記念写真。著者のサヨナラパーティにて。向かって左側が Katsu Funai 先生。

## 長崎大学

長崎大学 高橋 浩二

### 1. 本学の概要

長崎大学は、1857年にオランダ人医師ボンベ・ファン・メールデルフォールトにより行われた日本初の医学伝習を創基とし、戦争被爆による壊滅の体験を経て、1949年各種専門教育機関を統合し、5学部（学芸学部、経済学部、医学部、薬学部、水産学部）1研究所（風土病研究所）から構成される新制大学として再構築された。現在では、多文化社会学部（2014年設置）、教育学部（1966年に学芸学部から改称）、経済学部、工学部（1966年設置）、水産学部、環境科学部（1997年設置）、情報データ科学部（2020年4月設置）、医学部、歯学部、薬学部、からなる10学部、多文化社会学研究科、教育学研究科、経済学研究科、工学研究科、水産・環境科学総合研究科、医歯薬学総合研究科、熱帯医学・グローバルヘルス研究科、プラネタリーヘルス学環からなる8研究科、熱帯医学研究所、原爆後障害医療研究所からなる2研究所、高度感染症研究センター、附属図書館及び長崎大学病院を有する総合大学である（国立大学法人長崎大学 HP ①）。なお、1964年に教養部が設置され、大学における教養教育の基幹を担ってきたが、1997年に同部が廃止され、何度かの改廃の後、2013年10月に大学教育イノベーションセンターが設置されて今日まで至っている。現在では、当センターが教養部の機能の一部を担い、教職員向けのFDや学生向けの授業ふり返り（旧授業アンケート）や卒業生調査、学修状況報告、学生生活調査、コロナ禍学生履修状況調査等を行い、学外向けに授業ふり返り及び学習状況報告を公開している（長崎大学教育開発推進機構大学教育イノベーションセンター HP）。

本学の入学定員は1,641人（学部）であり、現員は7,419人、職員（教育職員・事務職員等）は3,240人である（2022年5月現在）（国立大学法人長崎大学 HP ①）。

本学の理念は次の通りである。

長崎大学は、長崎に根づく伝統的文化を継承しつ

つ、豊かな心を育み、地球の平和を支える科学を創造することによって、社会の調和的発展に貢献する。（国立大学法人長崎大学 HP ①）

その基本的目標は次の通りである。

大学の理念として「出島を介した『勉学の地』としての誇りと『進取の精神』を受け継ぐとともに、宗教や科学における非人道的な負の遺産にも学び、人々が『平和』に共存する世界を実現するという積極的な意志の下に教育・研究を行う。そして、蓄積された『知』を時代や価値観を越えて継承し、人類を愛する豊かな心を育て、未来を拓く新しい科学を創造することによって、地域と国際社会の平和的発展に貢献する。（国立大学法人長崎大学 HP ①）

詳細は本学ホームページ又は『2022年度 国立大学法人長崎大学概要』を参照されたい。

### 2. 主な体育関連施設

本学の体育関連施設は、4つの地区（文教・附属学校・坂本・片淵）に設置され、それぞれ屋外運動施設と屋内運動施設が設置されている。ここでは、大学に関わる地区の体育関連施設について紹介する（文献5）。なお、3. で述べる体育関連科目は、文教地区でのみ開講されている。

#### 1) 文教地区

##### ①総合体育館（2014年8月改修）

- ・トレーニング室
- ・第一武道場（柔道場）
- ・第二武道場（剣道場）
- ・サブアリーナ（ダンス・卓球場等）
- ・メインアリーナ（バスケットボール・バレーボール兼用2面・バドミントン兼用6面）
- ・ギャラリー





図1. 文教地区総合体育館

②総合グラウンド（2022年3月改修）

- ・ラグビー・サッカー兼用1面
- ・野球場1面



図2. 文教地区総合グラウンド

③補助体育館（2016年3月改修）



図3. 文教地区補助体育館

④テニスコート（2022年8月改修）



図4. 文教地区テニスコート

⑤ハンドボールコート（2021年11月改修）



図5. 文教地区ハンドボールコート

⑥弓道場

- ・射場（8人立ち）



図6. 文教地区弓道場（長崎大学全学体育会弓道部 HP）

⑦プール

- ・25m



図7. 文教地区プール

2) 坂本地区

①保健学科体育館

②医学部体育館

- ・バレーボール・バスケットボール兼用1面
- ・武道場1面

③グラウンド

- ・ラグビー・サッカー・野球兼用1面

④テニスコート

- ・2面

### 3) 片淵地区

- ①体育館（2014年9月改修）
  - ・バレーボール・バスケットボール兼用1面
  - ・武道場1面
- ②グラウンド
  - ・サッカー・野球兼用1面
- ③テニスコート
  - ・4面

### 4) その他

- ①学生プラザ（文教地区）
- ②臨海研修所
- ③課外活動等共用施設

なお、本学の体育施設の改修については、以下の制度に基づいて予算申請した結果、平成26年度以降、5件の改修工事が実施されている。その際、施設部や学生支援課と密に連絡を取り合い、文部科学省や学内に予算措置を申請している。すぐに予算措置がなされるものではないため、継続して申請が必要である。

- ①施設整備補助金（要求額2,500万円以上）
  - ・2014年度：総合体育館改修工事（耐震）
  - ・2015年度：補助体育館改修工事（耐震）
  - ・2022年度：附属中学校体育館改修工事
- ②学内予算（学内営繕要求）
  - ・2020年度：総合グラウンド改修工事（主に水はけ改善）
  - ・2021年度：総合グラウンド改修工事（400mトラック化、土慣らし）

### 3. 体育関連科目など

本学における体育関連科目は、表1に示すように、教養基礎科目の健康・スポーツ科学科目に位置付けられており、「健康科学」（必修1単位）及び「スポーツ演習」（選択1単位）の合計1から2単位を修得することになっている。教養教育の概要には、その意図が次のように示されている。

リベラルアーツ教育からの脱却と21世紀社会に求められる諸能力の基盤形成を行うとの合意のもと、アクティブラーニングを主とした主体的な学びの場としてのGeneral Educationalを行うこととしました。そして、それを教養教育と呼ぶことにしたのです。（長崎大学教育開発推進機構大学教育イノベーションセンター HP）

さらに、教養教育のねらいを次の3点から示されている。

1. 教養教育の必修科目で大学の学習法を身に付けるとともに、英語などでのコミュニケーション能力を高め、自主的に考え発信する力を養います。
2. 学問を尊敬する態度はもちろんのこと、自らを高め、変革する力、相互に啓発する態度の形成を行います。
3. 専門教育と連携し、各学部で育成する能力・態度の形成に貢献します。
4. これら教養教育と専門教育を、ディプロマポリシー（卒業認定、学位授与に関する方針）に向けて有機的に組み合わせます。（長崎大学教育開発推進機構大学教育イノベーションセンター HP）

以上のねらいに基づき、教養教育の内容と目標が以下のように示されている。

1. 研究者や専門職業人としての基盤的知識を持つ人
2. 自ら学び、考え、主張し、行動変革できる人
3. 環境や多様性の保全に貢献できる人
4. 地球と地域社会及び将来世代に貢献できる人（長崎大学教育開発推進機構大学教育イノベーションセンター HP）

以上の目標に対する具体的な内容は次の通りであり、社会人基礎力や21世紀型スキルと共通する部分が多く、「批判的精神」、「探究力」、「チームワーク力」、「一歩前に進む力」等の能力・態度を育成する内容であり、4分類15科目が設定されている（国立大学法人長崎大学 HP ③）。

表1. 教養教育科目の授業科目の構成

分類	科目区分
教養基礎科目	教養ゼミナール科目
	情報科学科目
	数理・データサイエンス科目
	健康・スポーツ科学科目
	キャリア教育科目
	プラネタリーヘルス科目
モジュール 科目	外国語科目
	教養モジュールⅠ科目 教養モジュールⅡ科目
選択科目	人文・社会科学科目
	生命・自然科学科目
	総合科学科目
	グローバル科目
自由科目	教職課程関連科目
特例(外国人留学生対象)	留学生科目



#### 4. 大学体育としての「スポーツ演習」について

3. において本学における体育関連科目を紹介した。本学では、2015年度まで必修科目として「健康科学」及び「スポーツ演習」を開講していたが、後者については、2016年度から教員免許状取得希望者や助産師、潜水士等の資格取得を希望する学生のための開講となった。その理由は、同年4月から施行された「障害者差別解消法」への対応が難しいと大学から判断されたからである。したがって、2016年度以降は毎年度200人程度の受講者に対して、専任教員4～5人、兼任教員1人が授業を担当している。なお、前者については体育教員が参画しておらず、医学を専門とする教員が中心となり、感染症、青年期の健康、心の健康、生活習慣病を扱う内容となっている(国立大学法人長崎大学 HP ④)。以下にスポーツ演習における「授業の概要」を示す。

様々な運動をとおして身体運動の効果や実践方法またはスポーツの文化、ルール、技術を習得し、生涯にわたって身体運動やスポーツに親しむことのできる基礎知識を身につけ、実践しようとする意識を育む科目である。(国立大学法人長崎大学 HP ④)

この概要からわかる通り、本学では小学校から高等学校において学習してきた体育・保健体育と大学の体育を接続させており、身体運動の実践を主とした生涯スポーツを目的とした科目と言えよう。

なお、本学でもコロナ禍の影響を受け、2021年度からコロナ禍に対応した授業が展開されている。その一例を紹介する。

- ・スポーツ庁 Web 広報マガジン『DEPORTARE』掲載記事を活用したレポート作成
- ・文部科学省「運動取組カード(中高生用)、スポーツ庁「手軽にできる!ながらでできる! My スポーツメニュー」を活用した運動実践及び『「運動実践」学習表』の作成
- ・教員作成の動画を参考にした運動実践
- ・生涯スポーツを企図した体育授業の考案と実践、改善案の提出

また、本学では経済学部にて夜間主コースが設置されているため、『健康・スポーツ科学』の授業を開講している。その「授業の概要」は以下の通りである。

健康や身体運動に関する身体的、生理的特性、またはその社会的側面などについて理解を深め、実生活で役立つ知識の獲得をねらいとする。(国立大学法人長崎大学 HP ④)

#### 5. まとめと今後の課題

2. で述べた通り、本学の体育施設は事務と連携して現状を把握し、必要な予算要求・申請して採択されることで改修が進められているため、比較的改修が進んでいると言えよう。他方で、4. で述べた通り、授業面では大学における体育の必要性が認識されておらず、教養教育としての体育が充実しているとは言い難い。

#### 参考文献

- 国立大学長崎大学 HP (<https://www.nagasaki-u.ac.jp/>, 2022年9月30日参照)
- 以下、紹介した内容の参照ページを挙げる。
- ①2022年度 国立大学法人長崎大学概要 (<https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/guidance/overview/outline/2022/file/rinen.pdf>)
  - ②「体育施設一覧」(<https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/campuslife/center/gymnastic/index.html>)
  - ③「授業科目の構成・授業科目区分及び各科目の目標等」(<https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/campuslife/course/general/take/2022/destination/index.html>)
  - ④「授業計画書(シラバス)」(<https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/campuslife/course/general/syllabus/index.html>) このページでは、2年度分のシラバスを Web 検索ページから参照可能となっている。
- 長崎大学教育開発推進機構大学教育イノベーションセンター HP (<https://www.innov.nagasaki-u.ac.jp/>, 2022年9月30日参照)
- 長崎大学大学院プラネタリーヘルス学環 HP (<https://www.planetaryhealth.nagasaki-u.ac.jp/>, 2022年9月30日参照)
- 長崎大学全学体育会弓道部 HP (<https://goukyu.wixsite.com/nagasaki/blank-5>, 2022年9月30日参照)